

論文の内容の要旨

論文題目 近世前期文学研究—伝記・書誌・出版—

氏 名 塩 村 耕

近世は文献資料の時代である。前代に比して格段に多くの書物や文書が作られ、流通し、残された。それらの中に古人は生き続ける。そのことはさまざまな文学研究の方法の中で、文学者の人間性に直接迫るといふ伝記的研究を、とりわけ有効としている。いっぽう、膨大な文献資料を正確に解説するとともに、モノとしての価値や意義を的確に判断するためには、書誌学的な知見の集積を必要とする。中でも文学の成立基盤を成す出版は近世初頭に本格化、この時代の文学のもつ性格を決定的に変化させた。近世の出版は近代のそれと異なった部分が大きく、文学の背景を知るためには、当時の出版の基本的構造を解明する必要がある。本論文は、以上のように伝記的研究・書誌学的研究・出版史研究の視座より、西鶴を中心とする近世前期の文学を総合的に解明しようとする試みである。

序章では、文献資料に取り組む基本的な姿勢を論じた。まず戦国を生きた一女性の残した名文として知られる「裁断橋銘文」を取り上げ、近代以降の誤った文字の読みを正した上で、何よりも文脈を重視すること、つまり「何が書かれているか」よりも「どのように書かれているか」を解明することが、文献資料に対する文学研究の立場であることを強調した。次に、論者が年来取り組んでいる西尾市岩瀬文庫所蔵古典籍の悉皆調査と書誌記述の経験に基づき、人と

書物とのかかわりについて総括した。すなわち、「ホモ・メモル・モリ（＝死を知る人）」としての人間の精華が、書物を通して、死を乗り越えて異世代間のコミュニケーションをはかる人、「ホモ・リブラリウス（＝本の人）」であり、近代以降は意識が希薄となってしまった、その営みについて具体的に考察を加えた。

第1章「近世前期文人伝」は、注目すべき数人を取り上げた伝記的研究の実践例である。近世大坂俳壇の先駆者、津田休甫は西軍の将宇喜多秀家の旧臣で、八丈島へ流される主君との別れに際し、頭・腰・心を丸めたという劇的な少年時代を送る。以後、乞食放浪の生活に入り、のち大坂の遊里と若衆歌舞伎という、近世の悪所に身を潜める。同時に畸人として世人に愛され、新興の文芸ジャンルである俳諧の名人として名高く、次世代の西鶴が限りない敬慕の念を寄せた。そのような人生を、一次資料を博搜して跡づけ、特に西鶴への影響の意味を指摘した。また西鶴同時代の啓蒙的著述家、山雲子について、従来謎であった出自や前半生を解明した。時に俗文学にも手を染めるこのような著述家を「俗学者」と位置付け、同時代への影響の大きさに比して、伝記が不明であることの多い俗学者の人生や活動の実態の一端を明らかにした。伝記の解明は、書肆と画工が禅僧に依頼して成った新発見の墓碑銘、新発見のものを含む著作群、著者がかつて仕えた備前岡山藩資料を通しておこなった。特に、出版界との関係の深さ、説法的世界への傾斜を指摘し、同時代の文壇のあり方を考察した。

第2章「西鶴の諸相」では複雑な西鶴文学を様々な視点と方法により論じた。西鶴は同時代文学の中であらゆる点から見て突出しているが、それがどのような人生に由来するのか、いまだ解明されていない。殊に作家自身を作中で演技させるといった特異な手法を駆使するが、そこに表れた作家と実像との差異も不明である。また、西鶴は文学活動の基盤を全面的に出版に置いており、当時の出版制度の解明や、西鶴本のモノとしての吟味も不可欠である。つまり、文学を伝記・書誌・出版の見地から解明する典型的な例として、西鶴を取り上げた。

伝記的な研究として、現存する西鶴の書簡を分析読解し、そこからしばしば相手の地を訪ねる旨予告するものの、それらが一切履行されておらず、異常ともいふべき腰の重い人であったことを考証した。さらに、作品中に見える徴証も援用し、「西鶴＝旅の人」説および「西鶴＝有徳人」説の通説を否定した。また、論者はかつて西鶴同時代の大坂案内記類の諸本をすべて調査して校本を作製刊行しており、そこから得た知見に基づき西鶴の住んだ地域の住民層を分析し、西鶴の伝記や文学との関わりを考察した。すなわち、住民層から見ても「西鶴＝有徳人」説は否定さるべきで、周辺住民の遊芸愛好の志向と西鶴のそれとが関係すること、さらに終生西鶴が町屋と武家地とのまさに境界上に住んだことと、その文学が複雑な性格をもつこととは無関係ではないと指摘した。

書誌学的文献学的研究として、まず西鶴の異文テキストを論じた。西鶴文学

のすべてのテキストは版本のみであって、原稿の存在も知られていない。わずかに知られる2つの異文テキストを取り上げ、そのうちの1つ、後世の随筆『見聞談叢』に引かれる一文が、西鶴遺稿集『西鶴織留』の一章の由緒ある異文、つまり別稿本に基づく可能性が高いことを論証した。次に、通説では西鶴作とされている『浮世栄花一代男』について、現存する伝本をすべて調査した上で、西鶴生存中の元禄6年正月の刊記は、別人の作を西鶴作に装うための書肆による改竄で、むしろ、再版とされる、没後の元禄11年の刊記が初版である可能性が高いとし、西鶴真作ではないことを指摘した。また、同書と同じ版元より刊行された西鶴遺稿集『万の文反古』についても、内容の分析より、他作を含むことを論証した。

さらに、文献探索の過程で得られた知見に基づき、西鶴に特異な「暗示的手法」、すなわち周知の典拠話に、ことさらなる改変を加えて読者に提示し、それによって重層的な読みをもたらすという創作手法を指摘し、西鶴文学のもつ複雑な性格の一端を解明した。たとえば、『好色五人女』巻4の八百屋お七の物語では、お七の刑死を知った恋人の吉三郎が、周囲の者がどのように止めても自害しようとしたのに、お七母親が何事かを吉三郎の耳元でささやくと、あっさり自害を思い止まるという謎の場面があり、何をささやいたのか答えが与えられていない。この問題について、挿画の粉本の解明により、お七には暗示的に小野小町の面影が重ねられていることを指摘し、行文の分析より、小町不死伝説を踏まえ、当時世上で語られた「お七生存巷説」を重層的な構造として備えていると指摘した。また遺稿集『西鶴名残の友』の中で、唯一見られる、西鶴同時代の巨人である芭蕉を評した文言「只俳諧に思ひ入て心ざしふかし」について、通説では好意的な評価と理解されている。これに対し、話の構造および典拠となった笑話を分析し、文脈によって暗示的に読者に示された反語で、強烈な皮肉であると結論づけ、そのことは蕉風俳諧をはじめとする連歌風俳諧の隆盛に嫌悪感を抱いていた、西鶴晩年の俳諧観と矛盾しないことを指摘した。

おなじく、文献探索の過程で得られた、注釈的研究の成果として、西鶴作中に見られる、同時代の勸進能興行、道中扇、伊勢の御師の活動について、実態が従来未解明であったが、新資料に基づく新たな知見を呈した。

第3章「書誌と出版」では、まず『さいとり』という、書誌学的に見て注目すべき、新出の近世初期絵入り歌謡古版本を取り上げ、まず版相より成立を推定した。そして、収められた鳥刺し舞芸能について、他の文献資料に残る痕跡や民俗芸能資料を集成し、テキスト上の価値を意義付けた。その結果、中世人のもつ「自然人」へのあこがれが、祝言性を伴って歌い演ぜられた芸能と結論付けた。また、書誌調査の過程で発見した、近世前期の有職故実版本の表紙裏に貼られた反古より、小説の絵組みを指示した文書を発見し、それが浮世草子作家月尋堂が裁判ものの小説『鎌倉比事』の挿画を指示したものと考証した。同類の挿画指示書は従来全く知られておらず、西鶴本をはじめとする浮世草子

がどのように製作されたか、示唆するものとした。

付録「近世前期江戸の出版界について一付、元禄末年以前の江戸版元と出版物一覧」は、論者が別に公表した「初期大坂の出版界について一付、元禄末年以前の大坂版元と出版物一覧」と一具を成すもので、京・大坂・江戸の三都のうち、元禄期以前の江戸の出版界について概観した。それまで上方版の重版を専らおこなってきた江戸の出版界が、西鶴本の重版を契機にして、貞享年間に重版を行わなくなり、以後独自の新作を生み出すようになるという変化を指摘した。このことは西鶴本が直接江戸の読者をも意識するようになったことを意味し、西鶴本の質的な変化をももたらした。このように江戸出版界の動向は上方のそれとも深く関わっている。いっぽう、前期の江戸の出版物は、上方版とは異なった一種独特の造本意識が見られ、殊に挿画には優れた版画を備えたものがあり、美術的価値が高い。しかしながら、比較的に残存が少ないために、研究が進んでいない。ここに付された江戸の版元と出版物の一覧は、論者の年来の手控えに基づくもので、従来ある同種一覧に比して飛躍的に多くのデータを収めており、今後の近世前期出版史研究の基礎となるものである。